わたしも博物館人（はくぶつかんじん）

ホタルと人と水辺を見つめて

水と文化研究会　荒井紀子

あんなにたくさんのホタルやメダカたちがいた川は？　まして保護しないといけない時代が来ようとは……。水と文化研究会では、琵琶湖周辺の身近な水環境調査に取り組み、ホタルの生息調査である「ホタルダス」と生活用排水の調査である「水環境カルテ」を行い、調査結果はC展示室（湖の環境と人々のくらし）の「ホタル」と「くらしのなかの水」のコーナーにて展示されています。是非一度ごらんになってください。

1989年から始まった「ホタルダス」には多くの人たちが参加し、住んでいる近くの川や水路へ何度も足を運び、変化していく水辺を敏感に感じ取っていきました。10年間の調査のあとも、しつこく観察を続けている人たちがいますが、私もその中の一人です。

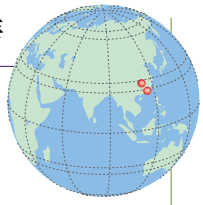
10年間の集大成である冊子『みんなでホタルダス』を読んで下さった岐阜県のある中学校から生徒たちに是非伝えてほしいという依頼があり、博物館を訪れた中学生に観察のおもしろさ、長い期間の水辺をとりまく出来事など体験談を話しました。今後もいろいろな年代層の人たちに語りかけ、ともに水辺環境を見つめていきたいと思っています。

麦わらでできたホタルのかごを手にした筆者

どこでも博物館

中国のカワウ事情

主任学芸員（鳥類学）
亀田　佳代子



昨年８月、私は中国を訪問する機会を得、湖南省東洞庭湖と香港マイポ自然保護区でのカワウ事情を見てきました。

長江流域にある東洞庭湖は、カリガネ（ガンの仲間）をはじめとする多くの水鳥の越冬地として知られています。ここでは、鵜飼のカワウと出会うことができました。お会いした漁師さんは、夏は漁網、冬は鵜飼で魚を捕るのだと教えてくれました。

一方マイポ自然保護区は、マングローブ林と干潟、そして基囲（ゲイワイ）と呼ばれる伝統的なエビ養殖場が広がる汽水域です。シギ・チドリ類やクロツラヘラサギなどの水鳥が、ここを越冬地や中継地として利用します。その一方で、最近ではカワウによる養魚池の食害が懸念され始めました。そのため、池にひもを張ったり、安価なティラピアを集めてカワウ専用の餌場を作ったりして、より高価な魚の食害を防ぐ工夫がなされていました。

日本とはひとあじ違ったカワウや水鳥との関わりかたは、琵琶湖での鳥と人との関わりを見つめ直す良い機会となりました。

←東洞庭湖の鵜飼のカワウ。中国では鵜飼にカワウを使う。十数羽のカワウが、湖岸にある漁師の家の庭先で休んでいた。

交流ノート

Ｂ展示室は、人と琵琶湖の歴史を紹介する部屋です。今日まで続いている琵琶湖と人間とのかかわりの歴史を展示しています。今回は意外な見所を展示交流員さんに聞いてみました。

▶Ｂ展示室には粟津貝塚や丸子船のような大きな展示が多い様ですが、見落としがちな面白い展示はありますか。

▶「粟津貝塚」の展示では、現在では見られなくなった４cmもある大きなセタシジミを食料としていた縄文人の姿を想像していただくことができます。実は、ここには当時の人々のうんこ（糞石）も小さな箱のなかに展示されています。

糞石

丸子船

▶丸子船についてはどうですか。

▶丸子船はこの展示室の中で年配の来館者の方々ともっとも昔話に花が咲くコーナーになっています。でも以外と知られていないのは丸子船の上方にあるお祭りの大型映像を見るには、丸子船周囲の石段（船着き場？）に腰を下ろすといちばん良いように作ってあることです。そこでゆっくりと腰を下ろして見ていただくと、迫力ある映像を楽しんでいただけると思います。

▶旧長浜駅舎の扉が開くと聞きましたが。

▶そうです。復元した駅舎の一番奥にある茶色い扉を開いていただくと、出港する観光船を見送ることができる仕掛けになっています。大人の方は気づかれないことが多いのですが、好奇心の強いお子さんは必ず開けていかれるようです。

旧長浜駅舎の扉